

## 自然は直線を好まない\* — 中尾真里『英国式庭園』—

レジャー関連仕事で薔薇とガーデニング展や蘭展を取材していた頃、イングリッシュ・ガーデンブームが起こっていた。何か新しいレジャーに思えるが、要は「庭いじり」。というと爺むさい趣味になってしまう。(菊地実)

\*本書サブタイトルから引用しました

### 花鳥風月は伝統

薔薇展と蘭展は客層が全く異なる。前者は庶民的。後者は当時の資生堂福原さんが会長を務めるセレブ層。私は貧乏人で実家の庭はなきに等しく、その後も安アパート住いが続き、花と縁なき生活。90年代後半、花卉生産一兆円を越す勢いで園芸に携わる人は三千万人に達した。よく考えると、秋津洲は花鳥風月を国是とする。平安貴族を始め僧侶や室町・徳川将軍と花・庭木・盆栽・庭園好きは枚挙にいとまがない。上が浄土・禅庭園や大名庭園なら、茶人は路地裏。暇を持て余した武士や平民層も花々新種作り勤しんだ。あまりにも俗謡だが「朝顔に鶴瓶取られて貰い水」。幕末、日本に来訪したプラントハンター\*1は日本を「こんなに多くの売り物の植物を見たことはない」と絶賛した。

最初に庭園を見たのは深川清澄庭園。ここはスリーダイヤ岩崎家が財力に物を言わせ、全国海岸から巨石奇石を集めた庭園。石趣味聖地とも呼ばれる。子供心に石の<良さ>は分からず、七十センチ以上怪物の如き鯉や鮎に驚いた。六義園やその後仕事で行った京都の庭園は魅力的だった。三段式修学院離宮、夜の銀閣寺。特に後者は修学旅行で見た平凡な庭とは全く異なった光景に魅了された。以来、全国各地に行くたびに庭園を見て歩いた。

### 変遷する英国庭園

英国は先進国伊・仏・蘭の影響を受け、独自の英国式



<講談社選書メチエ>

庭園を産んだ。やがて世界の植民地からさまざまな花木をプラントハンターが移入し、ガーデニング王国となった。

「同じ島国でも、イギリスは概して地形が平らである…特にイングランドでは、緩やかに起伏する丘の上の間を川が蛇行して流れているような地形がほとんどである」(3頁)「緯度は日本よりかなり高く…最も快適な季節といえば、春ではなく夏である」(4頁)として、シェイクスピアのソネットを引く。

庭の楽しみについてフランシス・ベイコンは「園芸は人間の楽しみで最も純粋なものである」(12頁)とし、ビートルズ楽曲に触れ「引退して田舎に引っ込む夢を持っていた人物として、あのシャーロック・ホームズ」(14頁)を挙げている。

「一口に庭園(ガーデン)と言っても、装飾庭園(オーナメンタル・ガーデン)、野菜栽培(キッチン・ガーデン)、果樹園(オーチャード)と多種類」(17頁要約)。「もともと西洋式庭園はイタリアに発祥し、フランスで完成した整形式幾何学庭園」。代表的庭園はあの広大なヴェルサイ

＜図表＞本書の構成

序章	英国式庭園の謎と魅力
第一章	ローマ時代から中世まで
第二章	ルネッサンス 宮廷から海外へ
第三章	一七世紀 内乱の時代から名誉革命へ
第四章	英国式庭園の誕生
第五章	楽園を求めて
第六章	ヴィクトリア朝の庭
終章	小さなコテージ・ガーデンと公共庭園

＜本書より＞

ユ庭園に代表される。これに対して「イギリスの庭園として私たちがまず思い浮かべるのは、なだらかにひろがる緑の芝生。まばらに立つ背の高い樹木・・・薔薇や草花中心の花壇。生垣、散歩道」(17-18頁)。英国式庭園は十八世紀に確立したスタイルで「風景式庭園ランドスケープ・ガーデン」(18頁)と呼んでいる。ジェーン・オースティン『自負と偏見』の中で、ダーシー氏のペンバリー亭を見て、主人公は「これほど自然に恵まれ、下手な趣味で自然の美しさが損なわれることの少ない場所」(108頁)と求婚を断ったことを後悔する。人工的整形庭園への非難がここにある。

楽園を実現した二つの発明

ランドスケープ・デザイン変遷もさることながら、海外進出で珍しい花木が次々に入ってきた。16-7世紀「イトスギ、笠松、アカンサス・・・花壇に欠かせないチューリップ、ヒヤシンスなどの球根植物もトルコから入ってきた」(159頁要約)。考えてみると、人の移動は動植物細菌の移動でもある。派手でけばけばしいアジア中南米の花木を英国で咲かせるのには工夫がいる。「常春の楽園を夢見るには二つの発明が必要だった・・・温室とワーディアン・ケースである」(166頁)「特にオレンジは南国の象徴であり、富と贅沢の象徴だっ(167頁)。オランダ・フランスのオレンジブームはイギリスに飛び火、日光を取り入れるため南向きの庭の一部に窓を大きくした建物「オレンジジャー」が元祖温室である。「日光を十分に通すガラス張りの温室・・・さらに鉄骨の総ガラス張りが登場するのは十九世紀で、板ガラス生産や窓税廃止1851年」(171頁)と、技術と法制度が絡まっている。1841年バクストンが建てた鉄とガラスの20メートル大温室が、1851年第一回ロンドン万博の水晶宮に発展する。

輸送手段が数ヶ月もかかった時代。植物輸送を解決したのがガラス張りの「ワーディング・ケース」(175頁)の

発明だった。

工業化時代のガーデニング

十九世紀英国は世界の工場となり、ロンドンはじめ、都市は石炭の煤で覆われた。カントリーの貴族大地主庭園ではなく、労働者住宅でも花木は植えられた。米作家バーネット『秘密の花園』は、庭や花木が「人々に幸福を与えてくれる」というメッセージを伝えてくれる。現実に庭がなくなる反面、自然流は復活する(210頁要約)。

二十世紀、モータリゼーションと郊外住宅に住む住人は自ら庭づくりに励んだ。現在のイングリッシュ・ガーデニングやホビーに大きな影響を与えている「ドゥー・イット・ユア・セルフ」の走りでもある。

庭園は時代によって大きく様相を変える。花も人工的改良が盛んである。例えば銀閣寺向月台・銀沙灘も江戸初期の増築物である。庭園は建物以上に時代の潮流で改築される。

本書は英国式庭園史を手際よく紹介している。また引用されている小説や詩が英文学史そのものである。詩人ゲーテ「君知るや南の国、レモンが花咲き・・・」(167頁)は、半世紀前文学を聞き齧っていた頃を思い出させてくれた。

\*1: ロバート・フォーチュン『幕末日本探訪記』は本欄で紹介しているが、「染井村」に驚いている。

■筆者/ 中尾真里(ナカオ・マリ)、1949年東京生まれ。奈良女子大学文学部大学院修了。奈良女子大学専任講師。

■書誌/ 1995年5月、講談社選書メチエ発行、四六判・268頁

なを参考までに、英国庭園と対極的なイスラム庭園の素晴らしい参考書を挙げておく

『楽園のデザイン/イスラムの庭園文化』ジョン・ブルックス、鹿島出版会1989年